
ひねくれ女子高生は面倒ですが何か？

ローズクォーツ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひねくれ女子高生は面倒ですが何か？

【Nコード】

N4570Z

【作者名】

ローズクォーツ

【あらすじ】

友達がいらない奴をあなたはと思う？

友達なしで中学時代を過ごし、高校生になっても作る気がまったくない篠崎千遥のちのちに近づく同年の男子・永島龍斗ながしまりゅうと。

龍斗は学年でも無駄にモテやがる奴（千遥・談）で、性格も良い。そんな奴大っ嫌いだ。

そんなひねくれ女子に近づく変わりもの男子の少しシリアスなラブコメディー？

一話（前書き）

初めての投稿で、少し変な文があるかもしれませんが。また、学生なので低クオリティーな小説です。

一話

「ねえ、私に近付かないで欲しい。」

その言葉を言っても貴方は私に近付いて来る。

数日前、私は図書館で勉強をしていた。

頭は良い方だが高校に入っても友達を作らず、いつも孤立していた。

ちよくちよく話かけに来る人もいるが、本や勉強に集中したいので、適当に話を済ませるので友達となるものはいない。

友人がいなくて寂しい奴と思われがちだが、そんな事はどうでもいい。

高校生活なんてたかが3年程度。

青春を無駄にするな、と入学当時に言われたがむしろ学校に通うのが無駄だと思う。

勉強なら塾や家でも出来るし、芸術など生活の役に立つだろうか？

こんなことを中学時代に教師に言ったら、コミュニケーションがどうのここの言っていた。

まあ、そんな事だろう。

所詮人間は自分勝手に『あの人がム力つく』『あの人頭がおかしい』
だの陰口を言ったり、最悪気に入らない人を殺したりする。

そんな人間関係だったら私は嫌だ。

私、篠崎千遥しのざきちほはものすごくひねくれていると自覚している。
こんな性格が最悪な奴と一緒にいても楽しくないだろう。

だから、自ら他の人と距離を置いていたのに。

まったく、馬鹿で変わっている奴だ。

一話（後書き）

変な文章ですみません。

誤字脱字があれば教えてください m (m

二話

さて、舞台は数日前の図書館となる。

勉強をしていると隣の方に人の気配を感じた。

べつに変な能力は持っていない。私の視野に入ってきたからだ。

そいつは小声で私に話しかけて来た。もちろん聞こえないふり。

そしたら奴は肩を軽く叩いて来た。モチ、無視。

奴はあきらめたのかどこかに行った。よし、勝った。

適当に勉強を切り上げ、図書館を出た……、はずだった。

誰かが私のブレザーの襟を掴みやがった。

「ぐうつ」と声を上げた私は誰だ、と思いながら後ろを向いた。

…ヤバっ。さっきの奴だ。

驚いていると奴は「やあ、やっと気付いたね。」と笑いかける。

そして驚いている私を見て「やっぱり無視していたんだ。どうしてだい？」

「べつに私にはお前に話すことはない。だからさっさと失せろ。」

その話し方に驚いたのか奴の手が私の襟を離す。

そりゃそうだ。私は今、眼鏡を掛け、制服は着崩すことなくいわゆる優等生っぽい格好だ。まあ頭は良い方だが。

襟を離れた隙に逃げようとしたが、今度は腕を掴まれた。

「待つて、逃げないで。君と同じ学校の生徒だよ。」「そんなの服みりゃわかるに決まっているだろう!」「そうだけど。ちょっと話があるんだけど……。」

そう言われ私は仁王立ちして「3分以内に話せ。簡潔にな。」と言う。

「偉そうな子だな。噂と全然違う。」

「噂はあくまで噂だ。と言うよりどんな噂だ。」

「君は篠崎さんだよ。」「ああ、まあ一応。」

「一応……。えつと対人恐怖症で気が弱い。孤立していて成績が良い。……みたいな?」

「後半は合っているが前半が違う。べつに人と話すのは全く怖くない。」

「あと俺と話すかぎり気が強い。」

「……。」

「ああ、ごめんごめん。」

私が傷ついたような顔（演技）を見て慌てて謝ってくる。

「で、用件は?」

ケロツとした顔でそう言くと、悔しそうな顔をする。「演技か……。」

ああ失礼だけど君って親しい人とかいないよね。」

「まあな。べつに気にしていないが……。」

「じゃあ友達になる。」

「断る！」

「え！即答！なんで！どうして！」

「テンションがウザい。あと、『なる』って言ったときの
マークがムカついた。」

「友達になろう。」

「普通に言っても駄目だ。じゃあ、バイバイ。」

「あつ、待つ…。」

腕を振りほどいて私は走り出す。

幸い図書館から駅まで近いのですぐに階段を駆け上がり、振り返る。

奴は追って来なかった。

「はあ、はあ……。よかった。」

私は息を切らしながら電車に乗った。

三話

電車は空いていたので座ることが出来た。

それにしても……、今日は疲れた。

だってテンションの高い馬鹿に絡まれ、挙げ句全力疾走だもん。

もうヤダ、泣きそう。

……… 所謂いえば奴は私と同じ学校って言ってたな。

でも今日パツと会っただけだし、話しかけられたら無視すりゃいい。

そう自分で納得し、ちょうど降りる駅に着いたので電車を降りる。

駅の中の本屋で参考書を探す。前から欲しかった本はなかったが、新作の参考書が出ていた。

どこかの有名大学の教授が書いた英語の参考書であった。興味が出たので、買ってみることにした。

店員に金を払い、商品をもらう。少しパラパラとめくり内容を確認する。

結構簡単な感じだったが丁寧に解き方などが書いてあり、なかなか良い本だ。

家に帰ってじっくり読むことにした。

四話

最寄駅から5分ほど歩くと私の家がある。

駅が近いので多分土地は高いだろうな。

私には関係ないがな。

さて、家に着いた私は鍵を開ける。

「ただいま。」と、言っても誰もいない。

私には物心ついた時から母親がいない。

父親から聞いた話しだとなんか離婚したっぽい。

まあ、父と母はその程度の関係だったのだろう。

私は母親に会いたいと思わない。

そんな私だから性格は最悪なのだろう。

とりあえず私は適当に洗濯物を取り込み、夕飯の下ごしらえをする。

家事は割と出来る方だと自負している。

あらかた家事を終わらせた私は買って来た参考書を開く。そして勉強をやり始めた。

2時間ほど勉強してから腹が減ったので、夕飯を食べた。

父親はいつも夜遅くに帰って来るので、ラップをかけておく。

腹が満ちたので少し眠たくなったが、明日も学校なのでシャワーを浴びる。

風呂に浸かると水道代がかかるし、少し面倒だ。

髪を乾かし、明日の授業の準備をする。

特に見たいテレビ番組もないし、友達がいないので電話やメールのやり取りもないし寝よう。

ベッドに入り目覚ましを5時半にセットする。

ベッドが私の体温で温かくなった頃、私の意識は飛んだ。

五話

シリリリリリ！

不快な目覚ましの音が私の耳に入ってきて来る。

手を伸ばして音を止める。

時計を見ればちょうど5時半で私は起きなければならない。

顔を洗い、口をすすぐ。

台所に行けば、空になった皿が机に置いてあった。

それらを洗い終わらせて洗濯物を洗濯機に入れてから弁当を作る。

朝食は弁当の余り物を適当に食べた。

食べ終わってから歯を磨き制服に着替える。

洗濯が終わったらしく洗濯機からピーつと音が鳴る。

洗濯物を干し、外を見れば太陽が少し顔を覗かせていた。

今日は晴れそうだ。

そう思いスクールバックを肩にかけ、革靴を履き家を出た。

うつつしいほど朝日が降り注ぐ道を、私は駅に向かって歩き出した。

六話

駅に着いて改札口に定期を入れてプラットフォームに入る。

電車は数分後に来た。やや混んでいたが、空いている座席が一人分あったので座る。

何駅か過ぎてだんだん学生やサラリーマンが多くなってくる。

サラリーマンの中にもものすごく疲れている感じのおっさんがいて、ちょうど私の前に来て『俺疲れていますから座席譲って下さい』アピールしていたが、無視する。

私だって疲れているんだ。

そう思っているとおっさんのアピールが終わった。

つくづく思うが私って性格最悪だな。たぶん結婚とか出来ないタイプだよ。

ほら、男子とかって優しい子とか気遣いが出来る子が好きな人多いし。

まあ恋愛とかどうでもいいしな。

そんな事を考えていると降りる駅に着いた。

さて、学校に向かうか。

七話

学校に着いた瞬間、少し油断していた事を私は後悔した。

教室に入ると昨日の奴がいきなり現れた。

「　　っ！」

「おはよう。昨日はいきなり逃げるなんて酷いな。」
と、奴は言う。そして……

『ビシッ』

額に小さな衝撃が走る。デコピンされた。

「！！！！」

「お仕置きだよ。人に話しかけられたらちゃんと答えようね。」

「知らない奴に話しかけられたら逃げろって習っているが？」

「ちゃんとこの学校の生徒だって言っただじゃん。」

「同じ学校って言っても知らない奴だし！」

「俺は3組25番の永島龍斗です！」

「ご丁寧にありがとよ！でも今やることじゃねえ。」「龍斗って呼んで。甘える感じで」

「断る！」

ギャーギャー騒いでいると他の生徒の視線が私達に向けられる。

そりゃそうだ。私はほとんど騒がないし、言い争っている相手はそれなりに美形だ。

女子が少し陰口叩いたの聞こえたぞ。まったく女子は。

騒ぐのに夢中で時間が確認出来なかったが、ある程度時間が経った

の
だ
ろ
う。

S H Rが始まる5分前のチャイムが学校内に響き渡った。

永島って言うヤロー「じゃあね。」と言って、自分の教室に戻った。

八話

S H R が終わつた後私に更なる災難が降り注ぐ。

「ねえ、永島君とどういう関係？」

そんな質問の嵐だ。

よくある『私らのイケメンに地味な女が話すんじゃないよ。』的な
感じだ。

「永島つて……？」

「朝、あなたと話してたじゃない。とぼけないで。」「ああ、べつ
に他人？だと思つぞ。」

「じゃあ……っ」

「千遥っ！」

私の名前を無断で呼び捨てで呼ぶ声が聞こえてきやがった。

すると、私の目が眼鏡の上から塞がれる。

「だゝれだ！」

「ハイテンション馬鹿？」「ハズレ！」

「じゃあ、いろんな意味で変態野郎？」

「ハズレ！つてなにげに酷いこと言つな。」

「私から見たお前の印象だからしかたがない。」

「……っ！まあそれは置いといて。」

「置いておくんだ……。」「そういえば、用件があつてね……。」「
なんだ？」

「友達になろうか。」

「ことわ……って昨日断ったけど。」

「答えが変わると思ったから。」

「変わらねーよ。」

ぴしゃりと叩きつけるように奴に言った。

いい加減私にかかわるのをやめて欲しい。

そしたら、

「だって君に興味持ったんだよ。明らかに他の子と違うし面白そう。」

「その興味の対象を勉強に向ける！成績上がるぞ！」「そうじゃなくて……。」「じゃあなんだよ！」

ゼエゼエと息を切らし私は言う。

奴はそんな私を見て私の頭を撫でる。

「触るな！」「いいじゃん。大型犬に威嚇する小型犬みたいな？」

「はあ？」

まさかの発言に驚く。小型犬？まあ私は奴に比べると小さい。

でも、人が一生懸命断っているのに。

「とりあえず……。」

「はあ…、なんだ？」

「メアド交換しよう。」

「ケータイ持ってない。」「じゃあ胸ポケットに入っているものは

何かな？」

「あつ……。」

クソっ…胸ポケットに入れるんじゃないかった。

「じゃあ……。」

「あつ……。」

私のケータイを取り赤外線通信らしいもので勝手に交換してしまった。

八話（後書き）

少しずつですが読んでくれる人が増えて嬉しいです。
投稿数は日によって変わります（ ; ）

九話

無理矢理メアド交換した後の休み時間、私にこれ以上ないくらいの災難（質問攻め）が降り注ぐ。

「メアド交換までしてただの他人とは言わないでしょう。一体どんな関係？」

「知らねー！！」

いきなり私が怒鳴ったのでさっきの質問攻め女子が怯んだ。

「さっきのやり取り見てたよな？私はべつにやりたくてメアド交換したわけじゃないの！いい加減気づきなよ。あっちが一方的にこっちに来ているの。だから質問するなら向こうにいきやがれ！！」

ついついカツとなってしまうた。相手の女子はびくりした顔で私を見てた。

ついでにクラス内は困惑した雰囲気包まれている。

（ヤバイ。すごく気まずくなった。）

私がどうするか悩んでいると、授業始まりのチャイムがなった。

とりあえず授業が始まるからひとまず大丈夫だろう。

急いで教科書やノートを出し、授業開始を待つことにした。

……次の休み時間どうやって過ごそうか。

十話

今日の授業が全部終わる頃私はぐったりとしていた。

「はぁ……………」

他の休み時間は質問が来る前に図書室や、自習室に逃げた。

私のクラスから結構遠いんだよね……………。

すると、

「疲れているようだけど大丈夫？」

そんな言葉を言われた。

朝の質問攻めしまくる女子ではない。入学当初から話しかけて来る女子だ。

学級委員の早川美咲はやかわみさきという名前らしい。

「ああ、大丈夫。とりあえずな……………」

「篠崎さんがあんなに話していたの、初めて見た。」「いや、出来ることなら今日のことは忘れて下さい。つい忘れろ。」

「…………初めてこんなに話してくれるんだね。いつもは『…………うん』もしくは『無理だ』とかYesかNoを答える程度だったのに……………」

クソっ……………。迂闊に話し過ぎた。

「じゃ、じゃあ私は帰らないといけないから……。」「えっ、ちょっと待って。篠崎さんって勉強出来るよね？」

「…………、じゃあね。」

「あっ、待っ…………。」

脇目もふらず私は逃げ出した。…………が、

「人が用件を話そうとしてるのに逃げちゃ駄目だよ。千遥」

どこから湧いた馬鹿に手を掴まれた。

昨日の事を思いだすな…。

「面倒だもん。だから手を離せ。」

「駄目。ちゃんと人の話を聞きましょう！」

「わかった！もう逃げないから…………。」そう言ったら、手を離してくれた。

「なんの用だ早川さん。出来る事ならさっさと終わるような事で…………」「勉強教えてくれる？」

「参考書を読もう。もしくは先生に教われ！」

「でも…………。」

「はいっ、これ。昨日買った参考書。」

「こらっ千遥、教えてあげなさい。あと俺にも教えて欲しいな」

「オススメ参考書パート2とパート3だよ。ハイテンション馬鹿にはパート4からパート7まで貸そう。」「参考書じゃなくて、直接教えてよ。」

「断る！！」

結構しゃべって疲れた。そんな私を見て早川さんは、

「あっ、じゃあこれで大丈夫だから。ありがとう篠崎さん。」

早川さんは引いてくれた。でも、

「俺にはきちんと教えて。……………優しく一対一で。」「気持ち悪っ
！」

俗に言う甘い声？とやらで耳元で囁かれる。多分他の女子なら顔を
真っ赤にしたりするだろうな。

でも私にはそんな可愛いは全くない。

以外な反応だったのか悔しいそんな顔をした。

その顔を見て私は少し勝ち誇った顔をした。

「ふがつー！」

「駄目だよ。人が少し落ち込み気味なのに…………。」
鼻をつままれた。

「全く、本当に意地悪な子だなあ。勉強くらい教えてくれたってい
いじゃん。」「私にメリットは？」

「教える能力がつくよ。」「必要ない。」
「必要だよ！」

ああ、長い。やり取りが長すぎて疲れた。

十一話

長いやり取りをなんとか終わらせるために、仕方がないので図書館で勉強を教えることにした。

「ここは？」

「それは×が0になるように代入すればいいだろ馬鹿野郎。」

「……………？どうやって？」「教科書見れば。」

「何ページ？」

「62ページ。」

それにしても…………、どうして基本問題が出来ない？

「めんどくさい。」

「そんなこと言うなよ。あつ、チヨコあげるよ！」「いらない！」

「えっ！君ってチヨコ嫌いなのか？」

「…………。」

チヨコは嫌いではない。むしろ大好きだ。ただ勢いで言ってしまった。

「そんなことより勉強に集中しろ！！そろそろ帰るからな。」

「ええっ、もう？」

「やっぱり今すぐ帰るから。」「じゃあ問14が終わるまで。」

「…………。」

面倒なので参考書を開き「ここ見りゃ分かる。」と言って私は帰る準備をした。

奴は参考書を見て、「こんなのじゃ分からない。教えてよ。」と

言っ たが、無視する。

さて、駅に向かうか。

図書館なのに騒ぎ出す馬鹿は他の人に注意を受けている。

その隙に図書館の出口に向かった。

十一話（後書き）

感想・評価があればお願いします。

十二話

なんやかんやで家に到着した。

家に帰る途中、外国人観光客に道を聞かれた。

……英語だったけどほとんどわからねえ。

仕方ないだろ。英会話は苦手だ。

「お前の英語は理解するのが不可能だ。」と日本語で言っただけを去った。

薄情な奴と言われようと私にはどうでもいい。

まあとりあえず家に着いたので家事を済ませる。

ほとんど昨日と同じような事をしているがいつもの習慣なんだ。仕方ないだろ。

ふう、と一息ついていっているとケータイがなった。

奴だ……………。

とりあえずケータイを見てやる。メールが届いた事を知らせるランプがついている。

メールには……………、

『どうして帰ったの？まだ勉強途中なのに（：：：）』

と、書いてあった。無視しよう。

シャワーを浴びた後、またメールが来ていた。

『無視するな』（Ｔ―Ｔ）返信しなさい！』
こいつ女か？

20分くらいたってさらにメールが来た。

『寂しい（Ｔ　Ｔ）ウルウル。構ってくれないと死んじゃう』
ウサギ気取りか？

とりあえずだるいので寝よう。メールは放っておくことにした。

メール拒否するにはどうやってやるんだ？

十三話

今日は初めて寝坊をしてしまった。
まあ、学校は遅刻しなかったがな。

とりあえずギリギリな時間に教室に入って来たので奴に会うことはなかった。

……今度からギリギリに来るようにしようかな。

そんなふうに出ていると先生が教室に入ってきた。

先生は連絡事項を話してから教室から出る時に、「篠崎、後で話があるから職員室に来い。」と、言われる。

大概ね奴なら怒られると予想するだろう。

だが私は悪い事は一つもやって……、怒られる用な事は多分やってない。

昨日外国人放置したが……。

とりあえず職員室に向かうことにした。

職員室で先生に、「話しはなんでしょうか？」と、用件を聞いた。

「ああ、篠崎は今一学年のなかでトップだったよな。しかも、入学

してからその座を誰にも譲らず。」

「はい。」

成績に関する話か？

「それで頼みたい事があるのだが？」

「何ですか？それは成績に関係しますか？関係しないのでしたら断るつもりですが？」

「なっ！」

どうやら成績に関係なさそうだ。私は自分にメリットがなければ頼みを受ける事が大っ嫌いだ。

「そう言わず、クラスメイトのためにやってくれないか？」

……、私は別にこのクラスに入りたくて入ったわけでもない。

「何をするのですか？」

「勉強の仕方のコツをクラスのみんなに教えてくれないか？お前は頭が良いが他の生徒はそうでもない。前のテストでは平均点が他のクラスに比べて一番低かったんだ……。」

「それは生徒のやる気の問題じゃないんですか？もしくは先生の教え方が良くなかったのでは？」

先生は口ごもる。

「じゃあ篠崎はいつもどうやって勉強しているんだ？参考程度に聞きたい。」

「いつも参考書を読んでいます。」

「それだけか？」

「はい……。」

勉強の仕方なんか人それぞれだろ。いつまでこんな話し聞かされるんだ？

「先生。もうすぐ授業が始まります。教室に戻って良いでしょうか？」

「わかった。いいだろう。今のことであればもう少し考えてくれるかい？」

「……………わかりました。」

とりあえずこの場をしのぐ言葉を言い、私は職員室を立ち去った。

自分で勉強教えればいいのにクソ教師と、私は呟く。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4570z/>

ひねくれ女子高生は面倒ですが何か？

2011年12月20日12時56分発行